東邦学誌第45巻第2号抜刷
２０１６年１２月１０日発刊

［実践報告］大学における地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発

－愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して－

白　井　克　尚
伊　奈　和　彦
鵜　飼　雅　弘
成　瀬　友　弘
尾　崎　綾　亮
佐　藤　公　保

愛知東邦大学

東邦学誌
第45巻第２号
2016年12月
実践報告

［実践報告］大学における地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発

－愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して－

白　井　克　尚
伊　奈　和　彦
鵜　飼　雅　弘
成　瀬　友　弘
尾　崎　綾　亮
佐　藤　公　保

目　　次

１．はじめに
２．大学における地域の埋蔵文化財の活用のあり方について
３．全学共通教養科目「歴史学」における弥生土器の拓本体験（2014年度）
４．全学共通教養科目「歴史学」における土器を並べる体験・火起こし体験（2015年度）
５．全学共通教養科目「歴史学」における製塩土器に触れる体験（2016年度）
６．おわりに

１．はじめに

最近では、大学での歴史教育実践について、様々な意欲的な取り組みが報告されつつある[1]。大学で歴史を学ぶことの意義とは、「『現在』を生きている１人１人が過去との対話を繰り返していくことこそ、過去を知り歴史を解明して、未来を考えるための重要な取り組み」[2] だと説明されている。しかし、反面では、授業中の私語やスマホの使用、居眠り、他の授業の準備、エスケープなど、大学生の歴史を学ぶ姿勢が問題となっていることも事実である。大学生にどのような歴史像を提供できるかは、歴史学の授業運営のあり方に関わっている。

現在、大学の学習場面においても、学生自らが主体的に学ぶアクティブ・ラーニングが叫ばれている。筆者（白井）も、そうした課題を意識して、2014～2016年度の本学での全学共通科目「歴史学」の授業において、アクティブ・ラーニングを意識した歴史学の授業改善に取り組んできた。その取り組みの中で、愛知県埋蔵文化財調査センターの職員（伊奈・鵜飼・成瀬・尾崎・佐藤）との連携を通して、地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発を共同で行ってきた。本稿では、大学における歴史学の授業改善の取り組みの一つの事例としてその取り組みの一端を報告し、今後の実践に資することとしたい。

２．大学における地域の埋蔵文化財の活用のあり方について

平成19（2007）年２月１日に、文化庁より、『埋蔵文化財の保存と活用（報告）―地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政―』が示された。この中では、埋蔵文化財の「教育的遺産としての意義」として、「埋蔵文化財は親しみやすい教材として、学校教育における社会科や歴史の学習に役立たせることができる」「今日の社会問題を見つめなおす教材として学校教育における諸活動、さらには生涯学習で活用することもできる」「体験学習等の諸事業は、地域や世代や様々な立場を超えた多くの人々が交流する機会となり、埋蔵文化財に直接触れる機会は、障害者や高齢者の社会参加の場を提供することにもなる」[3] ことなどが説明されている。しかし、また一方で、「大学では、考古学についての教育・研究を行っているところは多いが、埋蔵文化財や文化財の保護に関する教育・研究を行っているところは少ない。大学等の研究・教育機関には、このようなことがらについての配慮や対応も望まれる」[4] という問題点も指摘されており、大学における埋蔵文化財の活用のあり方についての検討を深めていく必要があることも事実である。そうしたときに、大学において地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発を行うことは、地域の歴史への理解を深め、埋蔵文化財の普及・啓発活動の目的の一つでもある「地域づくり・ひとづくり」[5] に貢献することにもつながるのではないかと考えた。

筆者（白井）は、本学における歴史学の授業[6]の到達目標として、「愛知の歴史を学び、地域の歴史を身近なものとして実感するとともに、歴史への理解を深め、自分と歴史との関わり方について考えることができる」ことを設定した。そこで学習の対象である地域の歴史については、遺跡の発掘調査によって明らかになってきている愛知県の歴史[7]を考えた。また、愛知県埋蔵文化財調査センターが取り組んでいる出前授業と連携し、職員の方をゲストスピーカとして本学の授業に招くことで、体験型歴史学習のプログラムを開発する可能性を見出した。筆者（白井）が、歴史学の授業の目的と概要として、設定したのは資料１である。また、「実感をもって愛知の歴史を学ぶ」という歴史学の授業の目標と概要についての考え方に基づいて、資料２のような授業テーマと内容構成を考えた。

資料１　歴史学の授業の目標と概要

授業の目的と概要	この授業では、旧石器時代から近現代までの愛知の歴史を知り、地域の歴史についての基礎的理解を深めることをめざしている。授業形態は、講義・演習方式である。最近の発掘調査により、貝塚、水田の跡、古墳、須恵器など、新しい遺跡や遺物が次々と発見され、歴史が塗り替えられている。授業において、そうした発掘調査の成果や埋蔵文化財を活用することを計画している。授業を通して、実感をもって愛知の歴史を学び、歴史を学ぶ意義について考える契機となることを望む。

資料２　歴史学の授業テーマと内容構成

① 授業のオリエンテーションとして、地域の歴史を学ぶことの意義について考える。
② 愛知の埋蔵文化財と私たち　―埋蔵文化財が語る愛知の歴史について知る―
③ 愛知における主な遺跡と発掘調査　―愛知の主な遺跡と発掘調査について知る―
④ 愛知の旧石器遺跡　―愛知の旧石器時代遺跡について知る―
⑤ 愛知の縄文時代遺跡　―愛知の縄文時代遺跡について知る―
⑥ 愛知の弥生時代遺跡　―愛知の弥生時代遺跡について知る―
⑦ 愛知の古墳時代遺跡　―愛知の古墳時代遺跡について知る―
⑧ 愛知の古代遺跡　―愛知の古代遺跡について知る―
⑨ 愛知の中世窯業遺跡　―愛知の中世窯業遺跡について知る―
⑩ 愛知の戦国時代遺跡　―愛知の戦国時代遺跡について知る―
⑪ 愛知の江戸時代遺跡　―愛知の江戸時代遺跡について知る―
⑫ 愛知の近代遺跡　―愛知の近代遺跡について知る―
⑬ 愛知の戦争遺跡　―「ピースあいち」に見学に行き、愛知の戦争遺跡について知る―
⑭ 私たちの住む地域に残る遺跡について　―地域に残る遺跡について、調べまとめる―
⑮ 授業のまとめとして、私たちの歴史への関わり方について考える。

こうした15回の授業の取り組みの中で、毎年１時間、愛知県埋蔵文化財調査センターの職員を招き、地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発を行った。体験型歴史学習の評価規準については、資料３のように設定した。

資料３　体験型歴史学習の評価規準

・グループ内活動の評価規準【関心・意欲・態度】

「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例
・グループ内活動において、自己の意見をまとめ、わかりやすく述べることができた。
「十分満足できる」状況（A）と評価される例
・グループ内活動において、自己の意見を述べるとともに、他者の意見に耳を傾け、グループとしての考えをまとめるべくリーダーシップを発揮した。
「努力を要する」状況（C）と評価される例
・グループ内活動において、自己の意見を述べることができない。

・ワークシートの評価規準【思考・判断・表現】

「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例
・遺物の形状から既習事項や観察などをもとにして、さらにそれを使用する場所にまで思いを巡らし、類推し意見を交換し、使用方法を考えることができた。
「十分満足できる」状況（A）と評価される例
・遺物を観察する際、これまでの既習事項を判断のもとにしつつ、実際の形態・質感などから多角的・多面的に考察して、使用方法に自分なりの考えをもつことができた。
「努力を要する」状況（C）と評価される例
・既習事項の理解や教材観察が不十分であり、使用方法についても、考えることができない。

以上のような考えに基づき、本稿では、2014～2016年度に、愛知県埋蔵文化財調査センターと連携した本学の「歴史学」の授業実践について、以下より、その取り組みの一端を報告していきたい。

３．全学共通教養科目「歴史学」における弥生土器の拓本体験（2014年度）

2014年度には、愛知県埋蔵文化財調査センターの授業者（伊奈）と連携しながら、体験的歴史学習のプログラム開発を行った。授業は、６月27日（金）受講者数約70名、６月30日（月）受講者数約70名を対象に行なった。

はじめに、Ｔ１（伊奈）が関わった清洲城城下町遺跡（清須市）の発掘調査の成果に基づいたスライドを提示し、地域における発掘調査のあり方について理解を深めた。次に、朝日遺跡や清洲城下町遺跡から出土した土器に触り、地域の遺跡に対する理解を具体的に深めた。授業の終末では、朝日遺跡（清須市）から出土した弥生土器片を、一人１つずつ配布し、弥生土器の拓本体験を行った。図１は、弥生土器拓本体験の学習指導案であり、授業の展開を示した。写真１・２は、授業の様子であり、大学生による真剣な取り組みの姿がわかる。

愛知東邦大学　歴史学A･B講義案

ゲストスピーカー　愛知県埋蔵文化財調査センター　伊奈和彦

１ 日 時　6月27日（金）第1限 歴史学B　6月30日（月）第1限 歴史学A

２ 対 象　教養科目「歴史学A」･「歴史学B」

３ 目 標

・ 遺跡の発掘調査や埋蔵文化財について知ることにより、歴史的視野を広げる。

・ 清洲城下町遺跡の発掘調査を通して、戦国末（安土・桃山）から江戸初期の時代を考察する。

・ 出土遺物を見せることにより歴史学習に興味を持たせる。

・ 清洲城下町遺跡に隣接する朝日遺跡に触れ、出土遺物の拓本をとることで歴史を直に感じる。

４ 講義計画

時 間	学生の の 学 習 活 動	指 導 者の 支 援
20分	遺跡の発掘調査について知る	・講師の自己紹介
	○ 発掘調査の実際を知る。（清洲城下町遺跡の発掘を通して行政発掘の実際を知る） ○ 天正地震について知る。 ○ 城下町としての清洲から、「清洲越し」を経て宿場町（美濃路）としての清洲への変遷を知る。 ○ 清洲の立地についても考察する。	・写真を見せて解説 ※パワーポイント使用 パソコン、プロジェクター 、USBメモリ ・清洲城下町遺跡の説明 ※スライド ・出土遺物を見せる。必要に応じて触れさせる。 ・天正地震の痕跡（剥ぎ取り）を見せて、町の復興の様子と「清洲越し」、城下町名古屋について触れる。
15分	戦国末（織豊期）から江戸初期の時代について考察	・清須の航空写真を見せて、清洲の弱点と名古屋の利点を考えさせる。 ※発問、挙手、指名 ・清洲会議についても触れる。※映画「清須会議」
	○ 織田信長、織田信雄、徳川家康の思惑について考察する。 ○ 城下町名古屋の建設が何故必要だったかを考察する。	
10分	朝日遺跡について知る	・朝日遺跡について説明し、弥生時代について思い出させる。・※資料配布 ・（公財）埋蔵文化財センター及び愛知県教育委員会の朝日遺跡紹介ｈｐを見せて解説 ※パソコン、プロジェクター使用。 ・出土遺物を見せる。必要に応じて触れさせる。
	○ 朝日遺跡が清須市から名古屋市にかけて存在しており、全国的に見ても広大な遺跡であることを知る。 ○ 弥生土器（完形品）を見る	
10分	拓本について知る	・拓本を理解するため、10円玉の乾拓を紹介。 ・スライドを使って説明
	○ 拓本についての説明を聞く（写真で説明する）	
30分	拓本を体験	・4～5人で1グループとし、グループで実施。 ・模様や質感、作り方の丁寧さ等に注目させる。 ・机間巡視しながらアドバイスをする。 ・ラミネートは指導者側で行う
	○ 各班で作業 土器選び→画仙紙で包む→霧吹きで湿らせる→タンポで叩き打ち→乾かす ○ ラミネーターでラミネートする ○ パンチで穴をあけて、しおり作成	
5分	まとめ	・振り返りシートを記入させる ・質問に答えながら歴史を学ぶことの意義にもふれる。
	○ 質疑応答 ○ 振り返りシートの記入	

図１　弥生土器拓本体験・学習指導案

写真１　弥生土器の拓本体験の様子

写真２　朝日遺跡出土品に触れる

レポート１は、2014年度の「歴史学」の授業を受けた受講生による感想の中から学習の様子がわかるものを選びまとめたものである。

レポート１　大学生による授業の感想（2014）

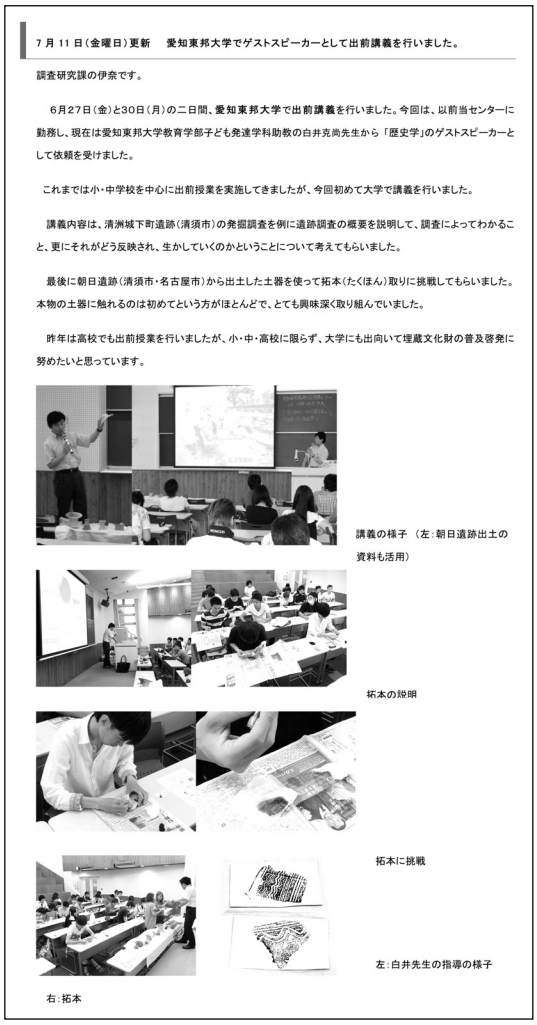
発掘調査のため、家をまるごと移動したと聞き驚きました。家をどかし、何もない平地を調査していくと、次々と遺跡の跡が出てきて、発掘調査に感動しました。縄文や弥生の遺物が、この平成の時代まで愛知県に残っているということは、とても良いことだと思います。その遺物から、年代や、住み方、環境などがわかるからです。最後、土器を使ってしおり作りは、結構楽しかったです。土器に触れることで、土器のすばらしさなどを学び、良い授業だと思いました。
今日は、いつもの授業と違って楽しかった。清洲城は、昔、本当は無かったということは知らなかったので驚いた。清須は、戦国時代の歴史で有名だが、近世などの遺跡もたくさんあって、歴史が奥深いと思った。あと、拓本体験が面白かった。意外と難しかったけど、一応できたので良かった。完成が楽しみだ。
今回は、愛知県埋蔵文化財調査センターの伊奈和彦先生に来てもらい、清洲城の歴史や周辺から発掘された出土品などについて知ることができた。特に、水琴窟や井戸枠などの話は、とてもおもしろいと思った。たくさんの出土品がある中でも、その当時のことがわかるからだ。昔の油をさして灯す明かりの皿などは、歴史のドラマなどで少し見たことはあったが、実物を見るのは初めてであったので、うれしかった。まだまだ自分の知らない歴史を知れたらいいと思った。
今日は、愛知県埋蔵文化財調査センターの伊奈和彦先生に特別に来ていただいて、調査のことについて話をしていただき、とても楽しかったし、勉強になった。また、数多くの土器であったり、皿などを見せていただいて、具体的に説明をしていただいたのがとてもよかった。また私が知らない歴史であったり、発掘の仕方を本当にわかりやすく解説してもらったのでほんとうに勉強になった。井戸枠を見せていただいて、その時の技術力は、現在よりまちがいなく劣っているのに、当時の職人さんのすごさを感じることができた。
地層から見える過去の歴史の説明が本当に興味深くてすごいと思ったし、歴史は奥深いと感じられた。瓦などから歴史が見えたり、お皿など、一つひとつの物が何百年と時を経て、私たちに過去に何があって、どんな文化だったのかを教えてくれるのだと思うと、このような歴史を知ることの大切さやすごさを改めて感じることができた。 朝日遺跡のことを説明していただいて、今までの歴史学の授業でもたくさん説明してもらったが、さらに付け加えてもらえたので、わかりやすくて楽しかった。教科書に書いてあることが全てではないこともわかったのでよかった。
発掘しても、道路になってしまうのがもったいないと思った。でも、そうやって世の中が便利になっていくのだからしょうがないことですよね。便利になるには、何かが犠牲になるのですね。あの小さい器には驚きました。本当に何に使ったんですかね？小人でもいたんでしょうか。しおりを作っているとき、小学生に戻ったみたいでワクワクしました。もっと変わった模様もやってみたいです。丁度しおりが欲しかったので、嬉しいです。早く完成しないかな。
大学生にもわかりやすいように話してくれたので、わかりやすかったです。そして、わかったのは、東海地方に土器や古墳に関する場所が多いなと改めて思いました。今は、名古屋市守山区の志段味に古墳があるということで、すごい話題になっているけど、愛知県に目を転じると、さらにすごいなと思いました。そして、私は、人生で初めて土器を触れたので、今日は良い体験ができたなと思いました。
今日のお話を聞いて、400年前の物が出てきたのに道路にしてしまうのは、とてももったいないと思った。でも、便利さを考えるとしょうがないことなのかなと思いました。伊奈先生たちみたいな人たちのおかげで歴史がわかっていき、今の私たちのための勉強になると思うと、伊奈先生たちはすごいと思いました。来週しおりが完成するのが楽しみです。上手に模様ができてうれしかったです。
清須市は、名古屋市に住んでいながらも行ったことがないので、一回足を運んでみたいなと感じることのできる授業内容でした。土器のしおりを作ってみて、単純な作業であっても印象に残り、体験型の授業も楽しく感じることができ、興味がわきました。
清洲城は史実に基づかないものと知り、シンボル欲しさで城を建築することに対して、個人的にあまり良く思えませんでした。考古学には文献研究だけでなく、発掘調査も必要で、その二つを照らし合わせることで、歴史を知ることができるのだとわかりました。 拓本体験は、選んだ破片が大きすぎて紙に収まりきらず、水分が思ったように抜けずに、最初は墨がうまくつきませんでした。でも、最後には、墨がきれいについたので、来週に完成するのが楽しみです。

これらの感想からは、学習の特色として、以下の三点を指摘することができる。

第一に、土器や遺物などの実物を見たり、触れたりすることにより、地域の歴史について具体的なイメージをもって理解することができた点である。「お皿など、一つひとつの物が何百年と時を経て、私たちに過去に何があって、どんな文化だったのかを教えてくれるのだと思うと、このような歴史を知ることの大切さやすごさを改めて感じることができた」「あの小さい器には驚きました。本当に何に使ったんですかね？小人でもいたんでしょうか」などの感想からは、学生なりに地域の歴史についてイメージを膨らませた様子がわかる。

第二に、体験型の活動を通して、実感をともなって地域の遺跡や埋蔵文化財について関心をもった点である。「人生で初めて土器を触れた」「土器のしおりを作ってみて、単純な作業であっても印象に残り、体験型の授業も楽しく感じることができ、興味がわきました」などの感想からは、体験的な学習活動が、印象的な活動となったことが伺える。

資料３　県HPに学習の概要が掲載（2014）



7月11日（金曜日）更新　愛知東邦大学でゲストスピーカーとして出前講義を行いました。

調査研究課の伊奈です。

6月27日（金）と30日（月）の二日間、愛知東邦大学で出前講義を行いました。今回は、以前当センターに勤務し、現在は愛知東邦大学教育学部子ども発達学科助教の白井克尚先生から「歴史学」のゲストスピーカーとして依頼を受けました。

これまでは小・中学校を中心に出前授業を実施してきましたが、今回初めて大学で講義を行いました。

講義内容は、清洲城下町遺跡（清須市）の発掘調査を例に遺跡調査の概要を説明して、調査によってわかること、更にそれがどう反映され、生かしていくのかということについて考えてもらいました。

最後に朝日遺跡（清須市・名古屋市）から出土した土器を使って拓本（たくほん）取りに挑戦してもらいました。本物の土器に触れるのは初めてという方がほとんどで、とても興味深く取り組んでいました。

昨年は高校でも出前授業を行いましたが、小・中・高校に限らず、大学にも出向いて埋蔵文化財の普及啓発に努めたいと思っています。

講義の様子（左：朝日遺跡出土の資料も活用）

拓本の説明

拓本に挑戦

左：白井先生の指導の様子

右：拓本

第三に、身近な地域の歴史の学習を通じて、地域における考古学研究や埋蔵文化財行政への意識を高めた点である。「井戸枠を見せていただいて、その時の技術力は、現在よりまちがいなく劣っているのに、当時の職人さんのすごさを感じることができた」「考古学には文献研究だけでなく、発掘調査も必要で、その二つを照らし合わせることで、歴史を知ることができるのだとわかりました」「400年前の物が出てきたのに道路にしてしまうのは、とてももったいないと思った。でも、便利さを考えるとしょうがないことなのかなと思いました」などの感想は、現在の考古学研究や埋蔵文化財行政のあり方についても、疑問を投げかけているといえる。

また、授業概要については、資料１のように、愛知県埋蔵文化財調査センターのホームページにも掲載され、報告された。このことが、その後の学生の歴史学への学習意欲を高めることにもつながった。

４．全学共通教養科目「歴史学」における土器を並べる体験・火起こし体験（2015年度）

2015年度には、愛知県埋蔵文化財調査センターの授業者（佐藤・鵜飼）と連携しながら、体験的歴史学習のプログラム開発を行った。授業は、６月26日（金）受講者数約70名、29日（月）受講者数約70名を対象に行なった。2015年度では、佐藤、鵜飼が、授業内容に沿った図や資料を用いたワークシートを作成し、学習内容についての理解を深めることとした。

はじめに、Ｔ１（鵜飼）が、焼き物の歴史についての話をし、愛知県における焼き物の大まかな歴史的変遷について説明を行った。次に、Ｔ２（佐藤）の説明にしたがって、「土器・ど・キット」[8] を用いて、歴史的思考力を働かせて、愛知県内の遺跡から出土した遺物を並び替えるゲームを行った。図２は、土器を並べる体験の学習指導案であり、授業の展開を示した。そして、朝日遺跡より出土した「円窓付土器」や清洲城下町遺跡から出土した「戸車」を触り[9]、それぞれの土器の使い方について考える活動を行った。授業の終末では、火起こし体験[10]を行い、当時の人たちの生活の様子について考える体験活動を行った。写真３・４は、授業の様子である。これらの写真からも、意欲的な学習の姿が伝わってくる。

愛知東邦大学　歴史学A・B講義案

ゲストスピーカー　愛知県埋蔵文化財調査センター　伊奈和彦

１ 日 時　6月27日（金）第1限 歴史学B　6月30日（月）第1限 歴史学A

２ 対 象　教養科目「歴史学A」・「歴史学B」

３ 目 標

- ‘本物’の遺物に触れ、質感等を感じることで歴史への興味・関心を高める。
- 土器を分類する体験を通してこれまでに学んだ知識を再確認させ、歴史的思考力の基礎を養う。
- 遺跡の発掘調査や埋蔵文化財について知ることにより、歴史的視野を広げる。

４ 授業案

時 間	学生 の 学 習 活 動	教 師 の 支 援
15分	遺跡の発掘調査について知る	・講師の自己紹介
	○ 発掘調査の実際を知る。（清州城下町遺跡の発掘を例に。※朝日遺跡にもふれる。）	・写真を見せて解説　※パワーポイント使用　パソコン、プロジェクター　USBメモリ ・必要に応じて出土遺物を見せる。
20分	土器分類ゲームを行う	
	○ 土器についての説明を聞く（5分）	・ゲームの説明と土器についての若干の説明を行う。 ・これまでの授業で習った土器の特徴を思い出させる。
	○ グループに分かれ土器分類ゲームを行う（10分） 縄文時代 ― 縄文土器 弥生時代 ― 弥生土器 古墳時代 ― 須恵器 奈良・平安時代（古代） ― 灰釉陶器 鎌倉時代（中世） ― 山茶碗 室町（戦国）時代 ― 古瀬戸製品 江戸時代以降 ― 陶磁器	・制限時間を設け、グループ間の競争意識を持たせる。 ・模様や材料、作り方の丁寧さ等に注目するなどのヒントを与える。 ・机間巡視しながらアドバイスをする。
	○ 各時代の完形品を見る。（ヒント）（5分）	・全員を注目させ、必要に応じて触れさせることも。
10分	土器について知る（答え合わせ）	
	○ 各時代の土器の特徴を知る。	・各時代の土器の特徴などを説明しながら答え合わせをする。 ・「時代」の特徴にも触れる。※社会の状況など。
5分	本日の学習を振り返る（まとめ）	・質問に答えながら歴史を学ぶことの意義にもふれる。
	○ 疑問点があれば質問する。	

５ その他

図２　土器を並べる体験・学習指導案

写真３　土器を並べる体験の様子

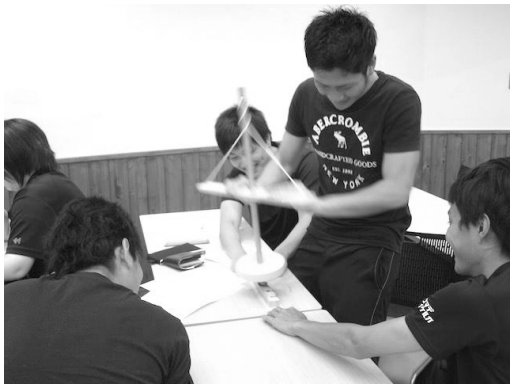


写真４　火起こし体験の様子

レポート２は、2015年度の「歴史学」の授業を受けた受講生による感想の中から、学習の様子がわかるものを選びまとめたものである。

レポート２　大学生による授業の感想（2015）

今日は、いつもに比べると体験が多く、とても有意義な講義だった。見て、触った方が聞くよりも理解が早いし、このような講義が良いなと思った。
いろいろな土器を見て、実際に触れることができて良かったです。火起こしは楽しかったけど、炎が出るまでがあんなに大変だということがわかって、昔の人はすごいなと思いました。今の世の中は便利なものがあふれている。
実際に土器を触ってみることで、重さや材質の違いがわかった。昔の人ってやっぱりすごいなっていうことはすごく伝わった。逆に今は何でもあって便利な時代なので、これからどうなっていくのか、昔のものがどう変化していくのか、面白いところでもあった。
実際に2000年前の土器に触れて、また重みを感じました。人が昔のものに触れることができるのも、このような授業を準備していただいたり、場を設けてもらったりしていただけたからだと思います。楽しい授業でした。
時代別に焼き物（土器・陶器・磁器）を並べることが難しかったです。火起こし体験では、タイミングさえつかめば、火を起こすことができて楽しかったです。ここから本格的に火をつけることは、大変だと思いました。貴重な体験ができて良かったです。
名古屋は、古くから都会であったのではなく、こういった土器や遺跡など、いろいろなめぐりあわせがあって、今の名古屋があると思う。古ければ古いほど、土器が赤くなっているのは、昔の技術の違いかなと思う。
土器や焼き物には、数千年の歴史があり、用途によって形が様々な違いがあり、触れたり、見れたりすることができて面白かったです。時代とともに焼き物が変化していくということについてのお話は、興味深かったです。
土器と陶器と磁器を見分ける活動で、先生に特徴を教えてもらったので、次に行ったら、全問正解する自信があります。弥生土器で円窓付土器というのがあって、まだ何の目的で使われたのか分からないという話には、興味が出ました。
土器についてこんなに詳しく知ることができる機会は、小中高校では無くて、すごく楽しかったです。土器を実際に触って、土器で重さが違っていて驚きました。火起こし体験でも、丁寧に教えてくれて、分かりやすかったです。
実際に土器や壺を触ったりするのは初めてで、比べて違いなどが分かり、嬉しかったです。朝日遺跡にも実際に足を運んで見に行きたいと思いました。
火を起こした体験が楽しかった。力をすごく使う作業だと思っていたが、少しの力で火を起こすことができた。土器の見分け方が難しかった。
火起こし体験が楽しかった。土器でも、種類によってさわり心地や重さなどぜんぜん違うということがわかった。たくさんの土器の話を聞いて、もっと知りたいと思った。
話をただ聞くだけではなく、土器を実際に目で見たり、肌で感じたり、火起こし体験をしたりと、普段の授業と違って、楽しく歴史を学ぶことができました。ありがとうございました。
実際に触ったり、体験したりする方が興味は湧く。土器に触ること、火起こし、いずれもめったにできない経験なのでよかった。楽しく学習することができた。
今日の授業を受けて、縄文時代から江戸時代になるにつれて、技術の発達が見られた。円窓付土器や戸車に触ったことで、すごく時代を感じ、そのおかげで今があると思った。
今日の授業を聞いて、土器、陶器、磁器のそれぞれの特徴がすごく分かりやすかったです。また円窓付土器は、表面にスジなどが入っていて、丁寧に作られていたことに気づきました。でも、円窓付土器は、まだ使い方が分かっていないのですね！ミステリーです！！
土器、陶器、磁器の違いを学ぶことができ、とても有意義であった。中学・高校では、深く触れることがなかったので、改めて学べて良かった。火起こし体験では、火をつけるためのコツがあることを知り、火をつける作業は、ものすごく体力を使うことがわかった。二つの土器を触って観察することができ、とても貴重な体験ができ、充実した授業だった。
火起こし体験や本物の土器に触れることができ、どのようにすれば火がつくのか、土器、陶器、磁器の違いを知ることができた。他にも、似たような形をした土器でも、使う目的によって作り方や材質を変えていることに驚きました。
土器を触る貴重な体験ができてよかったし、壺を触るのは初めてで、具体的な重さを知ることができた。部品同士のつなぎ方が少し気になりました。貴重な体験をありがとうございました。
重い土器は安定して物を入れるなどの役割があるなど、土器はそれぞれが違う形をしており、それぞれの用途があって、それを使い分けて作っていたということも、すごいと思った。とても良い体験になった授業でした。

これらの感想からは、学習の特色として、以下の三点を指摘することができる。

第一に、土器を触ったり、見せてもらったりしたことにより、地域の遺跡から出土した埋蔵文化財に対して実感を伴いながら理解を深めた点である。「実際に土器を触ってみることで、重さや材質の違いがわかった」「土器でも、種類によってさわり心地や重さなどぜんぜん違うということがわかった」「円窓付土器は、表面にスジなどが入っていて、丁寧に作られていたことに気づきました」などの感想からは、授業に持ち込まれたモノを通じて、学生なりに地域の歴史への関心を高めた様子がわかる。

第二に、体験型の活動を通して、意欲的に歴史学習に取り組むことができた点である。「見て、触った方が聞くよりも理解が早いし、このような講義が良いなと思った」「実際に触ったり、体験したりする方が興味は湧く。土器に触ること、火起こし、いずれもめったにできない経験なのでよかった」「火起こし体験では、火をつけるためのコツがあることを知り、火をつける作業は、ものすごく体力を使うことがわかった」などの感想からは、土器の並びかえ、火起こしなどの体験的作業を通じて、歴史的思考力をはたらかせて試行錯誤しながらも、意欲的に学習に取り組んだ様子がわかる。

資料４　県HPに学習の様子が掲載（2015）

平成27年度　活動報告 - 愛知県　　16/23 ページ

6月22日（月曜日）と26日（金曜日）に愛知東邦大学の歴史学の講座で出前講義を行いました。講義に参加した学生は月曜日が60名ほどで、金曜日が50名ほどでした。

講義風景

まずは、考古学の概説を行った後に焼物の歴史を解説し、講座に参加している学生たちに6ないし7グループに分かれてもらい、実際に遺跡から出土した土器、陶器などを時代順に並べてもらいました。正確に時代順に並べるのに苦労している学生が多いようでした。

土器を並べる実習

その後に、江戸時代以降の遺跡から出土した陶器製の戸車をグループごとに手渡し、全ほどの焼物の歴史の解説を若い出しながら、各自あらかじめ用意していた記録用紙に、材質は何か？いつの時代ものか？何に使用したか？を考えて記入してもらいました。学生たちは遺物を手に取りながら真剣にメモをとっていました。

次は舞錐式の火起こし器を使った火起こし体験です。以前の講義で体験したことがあると聞いておりましたが、その時にうまく出来なかった学生たちは今回こそ火起こしに成功してみせるとかなり意気込んでおりました。多くの学生は煙を出すことに成功し、中に火種を発生するまでに至った学生もいました。

火おこし体験

最後に朝日遺跡から出土した弥生土器を使った実習です。円窓付土器と盤を並べ、関係に見て交互に触れたり持ったりして、その違いを記録用紙に記入し、円窓付土器は何に使ったかを考えてもらいました。多くの学生は実際に土器に触れることがないので、土器の感触、重さなどに驚いていました。

円窓付土器に触れる実習

埋蔵文化財調査センターでは、遺跡から出土した「活きた教材」を活用した研修や体験学習を行っています。大学だけではなく、小中学校や高校への出前授業や地域の学習会、勉強会にも条件などが調整できれば伺います。ご希望の学校、組織は埋蔵文化財調査センターへご連絡ください。

http://www.pref.aichi.jp/soshiki/maizobunkazai/0000083170.html

第三に、身近な地域の歴史についての学習を通じて、地域の文化財や遺跡に対して関心をもつきっかけとなった点である。「今は何でもあって便利な時代なので、これからどうなっていくのか、昔のものがどう変化していくのか、面白いところでもあった」「名古屋は、古くから都会であったのではなく、こういった土器や遺跡など、いろいろなめぐりあわせがあって、今の名古屋があると思う」「朝日遺跡にも実際に足を運んで見に行きたいと思いました」などの感想からは、現在の生活につながる地域の遺跡や埋蔵文化財に関心をもつようになった様子が伝わってくる。

また、授業の概要については、資料４のように、愛知県埋蔵文化財調査センターのホームページにも掲載された。このことが、その後の学生の歴史学への学習意欲を高めることにもつながった。

５．全学共通教養科目「歴史学」における製塩土器に触れる体験（2016年度）

2016年度には、愛知県埋蔵文化財調査センターの授業者（成瀬・鵜飼・尾崎）と連携しながら、体験的歴史学習のプログラム開発を行った。授業は、６月３日（金）受講者数約100名、６日（月）受講者数約50名を対象に行った。

はじめに、Ｔ１（尾崎）が、大学周辺の遺跡について遺跡地図を提示しながら行った。次に、松崎遺跡（東海市）から出土した製塩土器片を一人１つずつ配布し、全体の部分を想像してスケッチする活動を行わせた。その後、答え合わせをしながら、製塩土器の使われ方について説明を行った。授業の終末では、Ｔ２、３（成瀬、鵜飼）より考古学や発掘調査について説明があり、学生たちは、愛知県内における埋蔵文化財行政について環境保護などの問題とともに理解を深めたようであった。図３は、製塩土器に触れる体験の学習指導案であり、授業の展開を示したものである。写真５・６は、授業風景を表したものであり、大学生による主体的な学習の様子が伝わってくる。

愛知東邦大学　出前授業　学習指導案

指導者　愛知県埋蔵文化財調査センター主事　尾崎　綾亮

1　日時・場所　平成２８年６月３日（金）、６日（月）　第１限

2　対象　経営学部１・２年、人間健康学部、教育学部３年
３日：約１００名、６日：約５０名

3　主題名　実物に触れる歴史学習～古代の塩づくりを学ぼう～

4　本時の学習

（1）本時の目標

ア “本物”の遺物に触れ、質感等を感じることで歴史への興味・関心を高める。

イ　土器の使われた時代、用途について類推し、歴史的思考力を養う。

ウ　遺跡の発掘調査や埋蔵文化財について知ることにより、歴史的視野を広げる。

（2）教材　松崎遺跡出土製塩土器脚部（古墳時代～飛鳥時代）

（3）本時の指導計画

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点・評価方法
導入 10分	考古学とは何か	・考古学についてどのような学問であるか概要を知る。 ・愛知東邦大学周辺の遺跡を学ぶ。	・講師の自己紹介をする。 ・文字のない時代からどのようにして歴史が明らかにされてきたのかを中心に説明する。 ・マップあいちを用いて大学周辺の遺跡を紹介する。	
展開① 10分	土器の説明	・土器のつくられた時代、出土遺跡について知る。	・マップあいちを用いて松崎遺跡の位置を伝える。 ・この時あえて土器製塩に使用されたものとは説明せず、どのような土器なのか考えさせる。	
展開② 25分	土器に触れ、特徴を考える。	・実際に製塩土器に触れて、簡単なスケッチをしてみる。	・何人かに数個ずつ製塩土器脚部を配布し、観察させる。 ・土器を扱う際の注意点を伝える。 ・遺物の形、色、焼け具合などに着目するように指示する。 ・気付いていない特徴があれば、コメントし、次の展開のヒントになるようにする。 ・脚部のみであり杯部はなくなっているが、どのような形のものが取り付くか想像で書かせる。	【思考・判断・表現】 ワークシート
展開③ 15分	用途を考える。	・何のためにつくられた土器なのか考える。	・スライドで完形の製塩土器を登場させる。	【思考・判断・表現】 ワークシート
展開④ 15分	どこで使ったのかを考える。	・製塩土器の利用された場所を考える。	・スライドで松崎遺跡の写真を写す。	【思考・判断・表現】 ワークシート
まとめ 15分	本時のまとめ		・ここまで観察してきた土器が製塩土器であることを伝える。 ・用途、どこで用いられたのかの答え合わせをし、土器製塩の方法を解説する。この時スライドも用いる。 ・古墳時代、飛鳥時代では、現代とは異なる土器製塩によって塩を調達していたということを強調する。	

図３　製塩土器に触れる体験・学習指導案

写真５　松崎遺跡出土の製塩土器片

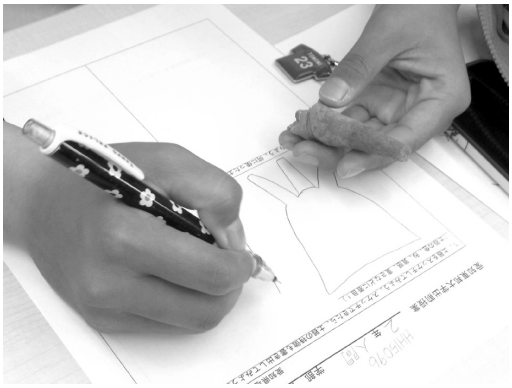


写真６　製塩土器の実測の様子

レポート３は、2016年度の「歴史学」の授業を受けた受講生による感想の中から、学習の様子がわかるものを選びまとめたものである。

レポート３　大学生による授業の感想（2016）

ワークシートが読み上げられた時は、すごく恥ずかしかったけど、予想が合っていてよかった。しかし、製塩土器は、思っていた形や使い方と違った。中学校の校歌に「窯跡」という歌詞があったが、当時は何で窯跡なんだと思っていた。今日の講義を聞いてからなるほどと思い、さらに今日の授業で実際にマップを見て驚いた。これだけあれば歌詞にもなるなと思った。
実際に土器に触れ、スケッチからどんな土器なのか考えることができて良かった。どんなふうに使われていたのかというように想像力を膨らませて学習できたので楽しかった。ただの棒みたいなものが、塩を作るのに使われていたと知って意外だと思った。製塩土器のように昔の人々の生活の中からの知恵があり、今の人々の生活があると分かり、過去の人々ってすごいなと思った。考古学により現代に通じるものがあると分かって、考古学ってすごいなって感じた。普段できない体験をして学ぶことができたから、楽しかったし、勉強になった。
最初に土器のかけらを見て全体を想像して描いてみるのは、とても難しかったですが、どんな形なのかを考えることは、想像力が膨らんで面白いと思いました。人それぞれ考えるもの、ことが違っているのも面白いと思いました。最後に見せてもらった土器がどのように使われているのか知って驚きました。私が最初見た時は、何かコップのような、何かを入れて使う（飲み物など）と思っていたので、まさか製塩土器、塩を作るために使う土器だと知って、びっくりしました。ヒントで海沿いといった情報をくれていたので、気がつけなかったのが少し悔しいです。今では海水をあんな簡単な作りの土器で塩を作るのは無理だと思います。それは昔の時代と違って海水も今は汚れていますし、人が口に入れられないと思うからです。こういったことを考えると、昔は自然なもの、きれいなもの（海水、魚など）を食べていて、そんな中でこの製塩土器のように工夫して自然と共存していたのだと思いました。
何の土器か全くわかりませんでした。どこの部分かもわかりませんでしたが、形を見て、完成形を見てもわかりませんでした。ですが、想像して描くことにより、昔のことを考えることができたので良かったです。全体的にクイズ形式だったので、自分でしっかり考えることができたし、楽しかったです。弥生時代から平安・奈良時代までこの土器で塩を作っていたということを知って、びっくりしました。昔はこんなふうに塩を作っていたと知って、私もこの土器を使って塩を作ってみたいと思いました。潮の満ち引きで、この土器がなくなってしまったりして、大変だったんだろうなということが想像つきました。濃い塩水を作ってからというように説明されていました。何回か作業をしてから塩を作っていたということを知って、手間と時間がかかっていることを知りました。
愛知東邦大学の近くにも、こんなにたくさんの遺跡があるとはし知らなかったです。自分の家の近くにも遺跡はあるのかが気になったので、調べてみたいと思います。 土器を通して様々なことを考えさせられました。昔は塩が海水で作れるほど、きれいな水だったが、現在ではゴミが浮いていたりして汚れている。土器のように家具もどんどん発展しているが、まずは環境というものを考えるべきなのではないかと感じました。 ただ単に海の近くだから製塩土器と決めたと思っていましたが、そうではなく、様々な検証をして、やっと製塩土器だと決めることができると学びました。土器を探すのも大変なのに、そこから何に使われたものなのか、いつの時代なのか考える。さらに、現在と土地の様子が全く違うので、もっと大変だろうと感じました。それでも今日まで、たくさんの土器が発見されていると思うと、発見した人に対し、すごいと純粋に思いました。 考古学だけではなく、いろいろな分野の人と協力して考えることで、いろいろなことが分かってくる、一つの分野だけでは難しい、理系などの分野の人と一緒に協力して研究することが大切であると知りました。
土器の破片からは、いろんなことが推測できて考えることは楽しいと思いました。土器の破片だけで塩を作っていたと分かった技術もすごいと思いました。塩水を作るだけでなく、濃い塩水を作っていることも発見しているのは、すごいと思いました。昔の人の知恵は海水を作る時に、とても役に立つと思いました。炭素から年代を測定して詳しく調べられることで遺跡の年代がわかること、遺跡の位置で海になってしまったことなどの環境がわかること、土器の出土で流通や経済などの状態がわかることは、面白いと思いました。
考古学というものは、「発掘した物から当時の生活を見る」といった内容だと初めて知った。確かにこれまで受けてきた講義内容では、昔の人の生活を考え想像する機会が多かった。そして今回実際に土器に触れ、過去の人々の生活を考えるということができた。実際に土器を観察すると、一見シンプルであるが、多くの特徴が出てきた。そこからその土器の用途や生活を考えるのは、大変面白かった。今回の場合は、それが塩を作る土器ということで、意外性にまた驚いた。このように予想して、研究して、自分の考えとの相違を感じるといったことも、考古学の一つの楽しさなのかもしれないと思った。

最初この土器を見た時は、製塩をする土器だとは思いませんでした。しかし、ヒントのおかげで、「もしかしたら塩を作るのでは？」と思いつきました。土器はどんな用途で使われていたのか考えさせるのに、わかりやすい手順、考えやすい手順で説明されていたと思います。また、昔は環境のことも気にしながらという言葉が印象に残っています。今では環境を汚してしまったためできません。土器も環境問題と、このような形で関係があるとは思いませんでした。土器と環境問題につながりがあるということは、他の分野でも何かしらつながりがあると思うので、それについても調べてみたいと思いました。
尾崎先生たちがどのように調べて、どのように予測しているかについてもお話が聞けたので、さすがプロだと思わされました！理系の人の協力が必要不可欠だとよく分かりました。 最初土器を見て、上と下に何かくっついていたのかな？と思ってワイングラスのようなものを想像してみました。答えと少し違いましたが、先生のヒントから用途については当てることができたので嬉しかったです。 昔の人の暮らしについて学ぶことは面白いなあとますます思いました。今の人より知識が無いと思っていたけど、環境のことを考えたり、海水を上手に利用して自分たちに必要な塩を作ったり、その塩もより濃度を上げるために海藻を使うなんて、本当に頭がいいなあと思いました。そういう所にロマンがあるなと感じます。一つの土器でも、先生たちがお話してくれた様に、奥が深くて、もっと一つ一つの土器に興味をもってみよう！と思いました。
愛知東邦大学周辺に、窯の遺跡がこんなにもあってびっくりした。思いもよらない所から発掘されていて、すごく面白いと思った。これまで発掘調査のイメージは、恐竜の骨の発掘のイメージが強かったけど、遺跡の発掘調査も考古学という学問の分野になると初めて知った。考古学の定義を改めて聞いて、すごく深いし、今までの歴史が知られていたのは、この考古学があったからなんだと思った。この学問は、これからも欠かせない大事な学問だと思う。発掘調査には、文系、理系に力が合わさって、仮説が立てられるんだと思うと、考古学では、たくさんの人と、たくさんの技術を使って、証明がされていくんだと思った。 手に取った破片が、塩作りの道具に使われていたなんて思いつかなかった。さらに発掘されたときに、なぜ立った状態で見つかったのかが分かった。塩の作り方は、今とあまり変わっていなくて、昔からの作り方に驚いた。汚い環境を作ってしまった今の人間が言うのも何ですが、製塩土器が使われていた時代のように、海水を使って塩が作られるくらいきれいな海になってほしいと思ったし、製塩土器を使って当時のように塩を作ってみたいと思った！！

これらの感想からは、学習の特色として、以下の三点を指摘することができる。

第一に、製塩土器の実物を見せてもらい、実際に触れたことにより、地域の遺跡から出土した土器について具体的に理解することができた点である。「土器の破片からは、いろんなことが推測できて考えることは楽しいと思いました」「今回実際に土器に触れ、過去の人々の生活を考えるということができた。実際に土器を観察すると、一見シンプルであるが、多くの特徴が出てきた。そこからその土器の用途や生活を考えるのは、大変面白かった」「手に取った破片が、塩作りの道具に使われていたなんて思いつかなかった」などの感想からは、製塩土器の使われ方について具体的に理解した様子が伺える。

第二に、製塩土器を観察するという体験型の活動を通して、意欲的に学習を進めている点である。「普段できない体験をして学ぶことができたから、楽しかったし、勉強になった」「全体的にクイズ形式だったので、自分でしっかり考えることができたし、楽しかったです」「もっと一つ一つの土器に興味をもってみよう！」などの感想からは、製塩土器に触れる体験が、楽しく学習をすすめるための契機となったことが伝わってくる。

第三に、身近な地域の歴史についての学習を通じて、地域における遺跡や埋蔵文化財に対して関心を広めている点である。「中学校の校歌に「窯跡」という歌詞があったが、当時は何で窯跡なんだと思っていた。今日の講義を聞いてからなるほどと思い、さらに今日の授業で実際にマッ

資料５　県HPに学習の様子が掲載（2016）

2016/6/27　　平成28年度　活動報告 - 愛知県

6月8日更新　愛知東邦大学で出前授業を行いました。

調査研究課の尾崎です。

6月3日（金曜日）、6日（月曜日）に**愛知東邦大学で出前授業を行いました。**人間学部、経営学部、教育学部の歴史学の受講者を対象として行い、3日に98名、6日に41名の学生を対象に実施しました。

今回は、「本物に触れ、質感等を感じることで歴史への興味・関心を高めること」「土器の使われた時代、用途について類推し、歴史的思考力を養うこと」「遺跡の発掘調査や埋蔵文化財について知ることにより、歴史的視野を広げること」を目標に、**「実物に触れる歴史学習～古代の塩づくりを学ぼう～」**という主題で授業を行いました。

授業では、**東海市の松崎遺跡から出土した飛鳥時代～平安時代の製塩土器を用いました。**

はじめに考古学、埋蔵文化財についての概要を説明し、**「マップあいち」**を用いて愛知東邦大学周辺の遺跡を紹介しました。

その後、製塩土器の特徴を観察しながら、土器をスケッチしてもらい、クイズ形式で「何のために使われた土器なのか」「どこでどのように使われたのか」を答えていただきました。

以下に授業アンケートに書かれていた学生のみなさんの感想をいくつかあげます。

・土器などに触り、スケッチをして、質感、重さを自分自身で実感することで、どのように、またどこで使われたのか考えることができました。その時代のものに触れることによって時代を感じることができたし、一生に一度あるかないかの貴重な時間でした。

・直接土器に触れることによって当時何をしていたのか、どのように使われていたのかを深く考えることができた。もっとこのような機会を増やしていって欲しいと感じた。

・愛知東邦大学周辺にもたくさんの遺跡があることに驚きました。今日触った土器はいろいろな所にひびが入っていて、ちょっと力を入れたら壊れてしまいそうな感じがしたけど、実際はすごく丈夫でした。発掘された土器の形や付着物などで、当時どこで、どのように使われたのかが分かることがすごいなと思いました。考古学は文系の学問だと思っていましたが、理系ともかかわりがあることを知りました。

出前授業の様子

プを見て驚いた。これだけあれば歌詞にもなるなと思った」「今では海水をあんな簡単な作りの土器で塩を作るのは無理だと思います。それは昔の時代と違って海水も今は汚れていますし、人が口に入れられないと思うからです。こういったことを考えると、昔は自然なもの、きれいなもの（海水、魚など）を食べていて、そんな中でこの製塩土器のように工夫して自然と共存していたのだと思いました」「愛知東邦大学の近くにも、こんなにたくさんの遺跡があるとはし知らなかったです。自分の家の近くにも遺跡はあるのかが気になったので、調べてみたいと思います」などの感想からは、これまで目を向けていなかった身近な地域の遺跡や埋蔵文化財に対しても、目を向けるきっかけとなったことがわかる。

なお、授業の概要については、資料５のように、愛知県埋蔵文化財調査センターのホームページにも掲載された。このことが、その後の学生の歴史学への学習意欲を高めることにもつながった。

６．おわりに

本稿では、大学における地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発について、愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通じた活動の一端について報告してきた。本実践の成果として、大きく次の三点を論じることができる。

第一に、実際に地域の遺跡から出土した本物の土器や遺物を見せてもらうことにより、地域の歴史について具体的なイメージをもって理解することができた点である。学生たちは、小中高段階で、本物の土器や遺物に触れた経験も少なく、地域の遺跡に対するイメージもあまりもっていなかった。そうした学生たちが、本実践を通じて、地域の歴史に対するイメージを具体的にもつことができた点が一つ目の成果であった。

第二に、体験型の歴史学習を授業の中で取り入れることを通じて、学生たちが実感をともなって地域の歴史や埋蔵文化財について理解を深めた点である。学生たちは、これまでの小中高の体験を通じて、「歴史」に対して、「覚えるのが苦手」「座学中心」という授業イメージをもっていた。そうした学生たちが、歴史を体験的に学ぶ学習を通じて、地域における遺物や埋蔵文化財に

対して理解を深めた点が二つ目の成果であった。

第三に、身近な地域の歴史についての実感を伴った学習を通じて、地域における考古学研究や埋蔵文化財行政への意識を高めた点である。学生たちは、身近な地域に遺跡や文化財が存在していても、これまであまり関心をもつことがなかったという。そうした学生たちが、本実践を通じて、地域の考古学研究や埋蔵文化財行政について眼を向け、関心をもつようになったことが三つ目の成果であった。

最後に体験型歴史学習のプログラム開発のための視点について述べておきたい。第一に、埋蔵文化財調査センターなどの地域の歴史関係機関との連携を不可欠とすることである。第二に、歴史学習と地域における遺跡や埋蔵文化財などとの具体的な位置づけについての教材研究を探究することである。第三に、地域の遺跡から出土した埋蔵文化財を活用し、学習者が本物に触れる感動を大切にすることである。以上のような視点から、今後も大学生が主体的に歴史像を育んでいけるよう、地域の遺跡や埋蔵文化財を活用した大学における歴史学の授業運営の工夫に取り組んでいきたい。

【注】

1 森谷公俊（2008）『学生をやる気にさせる歴史の授業』青木書店。荻野富士夫（2013）『大学「歴史教育」論』校倉書房等を参照。

2 木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治編（2016）『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文書、p.vi

3 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会（2007）『埋蔵文化財の保存と活用（報告）―地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政―』，p.4

4 同前，同書，p.13

5 岡村（2012）は、自らの考古学や文化財に関する教育・普及活動の経験から、現在の一般市民の認識の現状について、その「人気」は、「錯覚」、「過信」であるといい、「実際の考古学に関心をもつ者は、社会全体を見渡せば、かなり限定的であろう」とも述べている（松田陽・岡村勝行（2012）『入門 パブリック・アーケオロジー』同成社，pp.90-91）。そのような地域における考古学や埋蔵文化財への理解や関心を、大学生にも深め広めていく意義は、大いにあると考える。

6 本稿で報告する「歴史学」の授業は，2014～2016年度に本学で開講された全学共通科目「歴史学」という授業であり、受講生は、経営学部、人間学部、教育学部の全学部の学生を対象としたものである。

7 参考図書として、加藤安信編著『遺跡からのメッセージ　発掘調査が語る愛知の歴史』中日新聞社，2000年を使用した。

8 筆者（白井）が、愛知県埋蔵文化財調査センター在職中に、愛知県内の遺跡から出土した土器片を集めて開発した「歴史教材キット」である。白井克尚（2013）「社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かす―愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して―」愛知教育大学社会科教育学会『探究』第24号，pp.24-31を参照。

9 最近では、ハンズ・オンを意識した歴史系博物館の展示方法も広がってきている。広瀬浩二郎編著（2007）『だれもが楽しめるユニバーサルミュージアム“つくる”と“ひらく”の現場から』読書工房。広瀬浩二郎編著（2012）『さわって楽しむ博物館 ―ユニバーサル・ミュージアムの可能性―』青弓社等を参照。

[10] 本実践では、火起こし体験を行う際、朝日遺跡において「舞ぎり式」の道具の一部とも考えられる遺物（ひさご型木製品）が出土していることについても説明を行った。そうした説明を通じて、火おこし体験を愛知県内の弥生時代の人々の生活と結びつけて考えることもできたと考える。なお、歴史学習における火起こし体験のあり方については、小林大悟（2003）「火おこし体験の再検討」『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』No.21，2003年12月において論じられている。

【謝辞】

本実践に協力していただいた愛知県埋蔵文化財調査センターの職員の方々に感謝したい。本実践は、愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通じた共同開発によるものであるが、本稿の文責は全て白井にある。

受理日　平成28年 8 月30日